

2006 年度 I C U 夏期日本語教育 コース報告

コース責任者

C1	セクション AB
I 担当講師名	
A: 今井陽子 (コースヘッド)、保坂明香	B: 数野恵理 (コースヘッド)、三上京子
II 学生のうちわけ	
学生数	A: 10名 男性 5名 ・ 女性 5名 B: 8名 男性 4名 ・ 女性 4名
国籍	A: アメリカ4名、カナダ4名、オランダ1名、フィリピン1名 B: アメリカ2名、カナダ2名、韓国1名、タイ1名、キルギス1名、ザンビア1名
III 教材 (書名、扱った課の番号など)	
主教材	『Japanese for College Students, Basic Vol.1』
副教材	『げんき』 (抜粋) 『Situational Functional Japanese』 (抜粋) 『みんなの日本語・初級 練習C・会話イラストシート』 (抜粋) 『みんなの日本語・初級導入・練習イラスト集』 (抜粋) 『絵とタスクで学ぶ日本語』 (抜粋) 『なかま』 (抜粋) 『日本語の教え方スーパーキット』
視聴覚教材	『Japanese for College Students, Basic Vol.1』の音声テープ、ウェブ 『上を向いて歩こう』
IV コースの目標	
日本の文化についても理解を深めながら、言語習得の基本である4技能の入門レベルを学習し、その習得を目標とした。 聞く：基本的な日常会話を理解できる。 話す：日常生活における基本的な会話ができ、それを使って生活ができる。 読む：ひらがな、カタカナ、漢字で書かれた簡単な読み物が読める。 書く：ひらがな、カタカナ、漢字を使って400-800字の作文が書ける。	
V 評価の基準	
宿題、クラスでのワークシート	10%
作文 (3回)、ポストカード	5%
クイズ (ひらがな、カタカナ、漢字、単語)	10%
ユニットテスト	20%
オーラルテスト	15%
プロジェクト (校外学習5%、文集5%、スキット10%)	20%
期末テスト (筆記10%、オーラル10%)	20%
VI 授業の構成 (1週間/1課のうちわけ)	
<p>主要教科書に従って、一週間に2課の割合で授業を進め、基礎文法の習得とその運用練習につとめた。フォーメーションとドリルを3コマ、漢字、ロールプレイ、読みと作文のクラスに各1コマを当てた。漢字導入の日と読みの日は同じ日に重ならないようにした。</p> <p>4週目以降からは、基礎力を総合的に活用して行うプロジェクトを組み込んでいった。</p>	

<p>漢字シート、文法シートはそれぞれ一日おきに渡し、その他クラス内で終わらなかったタスクシートも宿題と課した。</p> <p>クイズは毎日行った。授業で習った後に行ったタイプのひらがな、カタカナ、漢字クイズのものと、新しい課が始まる前に覚えてこなければならなかった単語クイズの二つのタイプのものをした。</p> <p>2課に1回、筆記と口頭テストを計4回行い、最後の2課は筆記と口頭テストとともに期末に組み込んだ。</p>	
<p>VII 授業の内容</p>	
①聞く	<p>聴解だけに焦点を当てた時間は取らなかったが、毎日の授業で積極的に日本語を使ったり、読解の時間に読み終わった後で教科書を閉じて教師の朗読を聞かせたりした。</p>
②話す	<p>授業ではできるだけ日本語で話すようにさせ、各課のドリル、ロールプレイを中心に話す練習をした。また、スキットや武蔵境プロジェクトに関するスピーチを行った。さらに、ビジターセッションやオフィスアワーで会話の機会を設けた。</p>
③読む	<p>各課の漢字学習後に教科書の読解教材を読んだ。また、レストランのメニューや旅行のパフレットなどを使って、値段やカタカナを読み取る練習もした。</p>
④書く	<p>平仮名、カタカナ、漢字の時間に書く練習をした。第3、5、7課の読みの授業で作文、プロジェクトで暑中見舞いや文集を書き、オフィスアワーで添削をした。また、原稿用紙の書き方、基礎的なワープロの使い方も指導した。</p>
<p>VIII 校外学習</p>	
日 時	7月28日(金)
行 き 先	武蔵境
活 動 内 容	<p>2～3人のグループでタスクシートに従い、武蔵境駅周辺でオリエンテーリングをした。例えば、郵便局で切手を買って事前に書いておいたハガキを出したり、デパート内でゆかた売り場を探したり、カタカナの言葉を見つけたりした。また、翌週、クラスで一人3分のスピーチを行なった。</p>
<p>IX 総括(良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等)</p>	
<p>・良かった点</p> <p>両セクションとも、学生達は全体的に学習意欲が非常に高く、活気も見受けられた。学生間でかなり日本語のレベル差があったが、学生達同士非常に協力的で、学習歴のある学生は学習歴のない学生の手助けをするといったことが、自然にできていた。出席、宿題提出状況もよく、大変まとまりのあるクラスだった。</p> <p>学期を通して行なったビジターセッションは大変効果的で、学習意欲を高めた。学期の最後に行った、文集、スキットのプロジェクトでも各学生達の努力、達成度が表れ、学生自身もこの短期でここまでの進歩があったと認識でき、自信につながったようである。また、第五週から日本の歌も紹介したが、リズム、テンポ、ボキャブラリー共にC1レベルでも歌いやすかったらしい。毎日の練習を通して、既習単語の復習、いくつかの未習単語の習得へとつながったようだった。C1レベルで歌える歌は限られるし、中には歌が苦手の学生もいるが、日本の歌を紹介するのは楽しいアクティビティの一つとなるようである。</p> <p>・反省点、今後の課題</p> <p>基本条件であった平仮名学習の意味を勘違いしてきている学生が数名いて、たださらっと目を通す程度で準備完了だと勘違いをしていたため、出だしから遅れをとってしまった。平仮名ができないと、教科書を使った予習・復習もできず、授業で習ったことをノートにアルファベットで書くので、間違えて覚えてしまい、文法項目など全ての習得が遅れてしまった。いくら覚えてくるように言っておいても改善されないようなので、平仮名だけは宿題としてワークシートを郵送したり、web上で平仮名クイズを公開したりしておくというような工夫が必要かもしれない。</p> <p>漢字は、例年に倣い、各課のクイズのみで、ユニットテストは行なわなかったが、クイズが終わると忘れてしまってなかなか定着しなかった。そこで、期末試験には漢字テストを入れ、文集でも既習の漢字を評価対象に入れた。それにより、意識は高まったが、やはりユニットテストにも漢字を入れておいた方が</p>	

よかっただろう。

また、校外学習のときのタスクに、学生達に見知らぬ日本人に道を聞くというタスクを入れたが、必ずしも日本人が日本語で回答する訳ではなかったことが学生の指摘からわかった。彼らのたどたどしい日本語を聞いて、親切にも英語で答えてしまったり、自分の英語の勉強になるからと、英会話が始まってしまったりしたこともあったそうだ。さすがに、郵便局で切手を購入する時は日本語のみだったようだが、今後の課題は日本語のみでできるタスクをもっと入れることだ。また、武蔵境は普段からよく利用しているので、他の場所がよかったという意見もあった。

・セクション A

セクション A はロータリー奨学生 3 名、9 月以降に日本に残る学生が 4 名(内 3 名は ICU)、残りのほとんどの学生はこの授業を通して、母校の語学必須科目の修得という名目で来ていた。大半の学生たちは最後まで予習復習を欠かさず、真剣に取り組んでいたが、中には読み書きはいらぬから、話す方を伸ばしてほしいと、プログラムの根本的な趣旨を理解しないで参加していた学生もいた。そのため、第一週から、かな習得に遅れを取り、インテンシブコースの心構えもないまま授業に来る学生の指導は授業内だけでなく授業外でも難しかった。今後は彼らの目的意識、学習意欲を事前に充分審査し、このプログラムに参加するからには最低でもかなを習得してくるよう厳しく指導し、コースに見合った学生を選考するのが一つの対策かと思われる。

問題は多少あったが、授業内ではお互いが協力し合い、思いやりのあるクラスであった。学期末のスキットではその抜群のチームワークのもと、それぞれの個性が感じられる内容のものが多く、ユーモアがあり、演じている側も視聴者側も楽しんだ。

・セクション B

セクション B で 9 月以降日本に残る学生は ICU のロータリー奨学生 3 名とその他 2 名の計 5 名だった。1 名の学生はディスレクシアのため、カタカナ・漢字の習得が非常に困難だったので、後半から読解と漢字は免除し、読解と漢字の時間は取り出し授業で文法の口頭練習(復習)をした。もう 1 名、平仮名でつまずき、サマーコースの進捗についてくるのが困難な学生がいたが、最後まであきらめることなく非常に熱心に勉強し、コース終盤には「日本語の文法体系がわかってきた」と、他の学生と同じように作文を原稿用紙 2 枚に書いてきた。

初日のオリエンテーションで伝えておいたように、どの学生も非常に積極的な姿勢で日本語学習に取り組み、一つのチームとして助け合う活気あるクラスになり、教師側もやり甲斐があった。

C2		セクション	
I 担当講師名			
北村 愛子 (コースヘッド)		梅澤 薫	
II 学生のうちわけ			
学生数	11名	男性	6名 ・ 女性 5名
国籍	アメリカ9名、オーストリア1名、台湾1名		
III 教材 (書名、扱った課の番号など)			
主教材	『Japanese for College Students Basic Vol.2』		
副教材	参考・抜粋： 『げんき』 『Japanese for Everyone』 『Structural Functional Japanese』 『日本語コミュニケーションゲーム 80』		
視聴覚教材	『わくわく文法リスニング』 『1日10分の発音練習』		

	『楽しく聞こう』 『ヤンさんと日本の人々』 『新日本語の基礎 復習ビデオ』 『24 Tasks for Basic Modern Japanese』
IV コースの目標	
初級の中段階であり、日常生活に必要な基本的言語能力（読む、書く、聞く、話す）の向上、日本社会・文化への理解を深めることを目標とした。 具体的に、日常的・身近な話題として、自分自身、家族、出身地などの話題が扱える。 丁寧な話し方とくだけた話し方の使い分け、そして発音の正確さの強化を目標に挙げた。	
V 評価の基準	
単語クイズ	10%
レッスンテスト（5回）	35%
口頭試験（3回）	20%
期末試験	10%
プロジェクト（作文・発表）	10%
宿題（フォーメーション・漢字・読解）	10%
作文	5%
VI 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）	
基本的に1課に6コマ使い、2課終了ごとにレッスンテストを行った。	
文法導入・練習	3コマ
復習（ロールプレイ等）	1コマ
読解	1コマ
聞き取り・発音	1コマ
他の時間を、ビデオ、発表練習、ビジターセッションなどにあてた。	
VII 授業の内容	
①聞く	新出事項に焦点をあてた文や会話の聞き取り、また各課の復習を兼ねた、新出事項を含む自己紹介文や家族、出身地についてのモノログを作成し、質問に答えさせた。
②話す	特に文法導入・練習のクラスでは、ペアワークを活用し、口頭練習を重視し、発展的に練習を行うように努めた。また、イントネーションや長音、促音に重点をおいた発音練習、そして最後のプロジェクトのための発表練習も行った。
③読む	教科書の読解を宿題として課しておき、クラス内で答えの確認を通じて、読み方、答え方を指導した。また、適宜関連する読み物をクラス内にて与えることもあった。
④書く	各課終了後に作文の課題を出した。聞き取りで使用したモノログを作文のサンプルとし、クラス内で簡単な指導を行った。添削後は、オフィスアワーを利用して、個々に指導。プロジェクトでは、約1000字で出身地に関する作文を書かせた。
VIII 校外学習	
日 時	8月4日（金）
行 き 先	吉祥寺駅周辺
活 動 内 容	3～4名のグループでオリエンテーリングを行った。地図を見ながらタスクシートで指示されている店などのポイントをまわったり、町の人に質問したりした。次の日のビジターセッションにて、オリエンテーリングの報告、話をした。
IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）	
コース開始時、C2の学生間でレベルの差があり、懸念していたが、学生達はお互いを尊重し合い、助け合っていたおかげで、より効果的な結果を生むことができた。また、文化プログラムへの参加や、校外学	

習の吉祥寺オリエンテーリングはクラスのまとまりを更に促し、勉強しやすい雰囲気、環境作りを助けた。聞き取りの弱い学生が多かったので、各課に聞き取りのクラスを持ったのは学生達にとって役に立ったようである。聞き取りには、副教材も利用したが、コース目標に身近な話題、自分自身・家族・出身地などについて扱うことができるということを掲げていたので、そのテーマで、且つ新出事項を使ったモノログを作成した。このモノログを作文の手本として利用し、聞く、話す、書く、という一連の活動を行ったが、翌日提出されてきた作文は、特別な指導をしなかったにもかかわらず、その手本があったためか、構成や文型においてなかなかの出来であった。そのため、学生のよく間違えるところが浮き彫りとなり、添削後の指導がしやすかった。

また、各課の作文とプロジェクトのテーマを自分自身・家族・出身地と一環させていたが、これは学生がコース期間中に実際に人からよく聞かれたことのように、「クラスで何度も練習したから自信を持って話せた」「実用的で役に立った」というコメントを直接もらったので、成功したと思われる。

反省すべき点は、学生のプレースメントに関してである。コース開始当初からC1に移動すべきかどうか悩んだ学生が2名いた。しかし、授業内に復習を取り入れたり、オフィスアワーを利用したりして、それぞれの学生の弱点を強化していくということで、C2に残ることになったのだが、オフィスアワーだけではフォローしきれず、コース後半はクラスの進行についていくのも困難になってしまった。毎夏、学生のプレースメントは困難な問題となるが、初級のC2に限っていえば、夏季の短期集中コースで一日における進捗が速いので、オフィスアワーを使ってC1の最後の項目をカバーするというのは無理な場合が多いと考えたほうがいいのかもわからない。また、学生のコース移動可能な日をあともう一日延ばしていただくと、より判断しやすくなると思われる。

オフィスアワーに関しても、もう一工夫する必要があったように思われる。基本的には、宿題や作文などで間違えたところ、分からなかったところを聞くというふうにしてはいたが、コース前半は質問がないという場合もあったりしたので、もう少し有意義に時間を使えるように配慮する必要があったように思われる。また、学生から日本人と話す機会が少ないので、オフィスアワーで話す練習をしたかったという声もあったが、コース中にあと1、2回ビジターセッションを増やせば、学生達にとって満足のいくものになったのではないかと思う。

C3		セクション AB	
I 担当講師名			
A: 石川 素子 (コースヘッド)・小松 満帆		B: 開 めぐみ (コースヘッド)・待鳥 直子	
II 学生のうちわけ			
学生数	22名	男性	12名 ・ 女性 10名
国籍	A: アメリカ7名、カナダ2名、中国1名 B: アメリカ11名、イタリア1名		
III 教材 (書名、扱った課の番号など)			
主教材	『Japanese for College Students Basic Vol.3』		
副教材	自作のハンドアウト 参考: 『げんき』2 『Japanese for Everyone』 『絵で導入・絵で練習』 『絵でマスター 日本語基本文型85』等		
視聴覚教材	特になし		
IV コースの目標			
基本文型・語彙・82の新出漢字を習得して、日常生活の様々な場面で状況にあった適切な日本語で効果的			

にコミュニケーションができるようになる。	
V 評価の基準	
期末試験	25%
ユニットテスト	25%
クイズ	15%
ロールプレイ	10%
作文	10%
プロジェクト	10%
宿題・クラス参加	5%
VI 授業の構成 (1週間/1課のうちわけ)	
平均, 1課に6~8コマを使い、2課終了ごとにユニットテストを行った。 フォーメーション・ドリル	8-10コマ
漢字	1コマ
読解	2コマ
ロールプレイ	2コマ
ユニットテスト	1コマ
プロジェクト・ビジターセッション	2コマ
VII 授業の内容	
①聞く	各課ごとに特に聴解練習は取り入れなかったが、ユニットテストにディクテーションと長文聴解問題を取り入れた。
②話す	各課のドリル、ロールプレイで練習をし、プロジェクトで口頭発表をした。さらに、2回のビジターセッションで日本人と会話をした。
③読む	各課の読解教材を使用して、色々なアクティビティやディスカッションをした。
④書く	作文を4回書き、添削後に書き直して再提出した。プロジェクトのパネル作成をした。
VIII 校外学習	
日 時	7月28日(金)
行 き 先	江戸東京たてもの園
活 動 内 容	プロジェクトの一環として校外学習を実施した。プロジェクトのテーマ・目標は、大正・昭和時代の建造物の特徴について学習することであり、インターネットサーチ、ビジターセッションをとおして、情報収集した後、江戸東京たてもの園で得た情報を調査結果として口頭発表した。さらに、パネルを作成して展示した。
IX 総括 (良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等)	
<p>セクションAは学習意欲が高く、授業にまじめに取り組む努力家が多く、クラス全体としてバランスが取れていた。しかしながら、クラス構成は、大学生9名、在日15年のICUの教員1名で、授業の運営上、難しい点多々あった。文法基礎能力が備わっている学生が大半であったため、文法の習得はそれほど困難ではなかったが、母国語の影響で発音、イントネーションに問題のある学生が何人かおり、その練習をさせるべく努力をしたかったが、時間の関係で思うにまかせなかった。また、プライドが高すぎたり、能力を過信していた学生もおり、自信を持って発話できなかつたり、すぐに英語を使ってしまう学生もおり、心がけてアドバイスをするなどの努力をした。</p> <p>セクションBは学生の日本語能力に大きなバラつきがなく、教室運営が容易であった。学生間の関係もよく、全体的に協調性のある学生が多く、クラス活動に活発に参加した。学習態度もよく自主学習にもまじめにとりくんだ。コースの第3週目ぐらいまでは、消極的な学生が多かったが、徐々に自信を付け積極的に発言する学生が増えた。その理由としては、学生が日本の生活に慣れてくるにつれて、精神的余裕を取り戻した結果、聞き取り、発言が容易になった点があげられる。また、コースを通して、インフォーマ</p>	

ルで話しやすい雰囲気を作り出すよう、様々なコミュニカティブ・アクティビティーやタスクを取り入れたのも効果的だったように思われる。反省点と今後の課題としては、まず個別指導の徹底があげられる。再三注意したにもかかわらず、サインアップした時間に来ない学生がいた。また、15分間でできるだけ多くの疑問を解消し、学習に効果を挙げるよう工夫する必要性を感じた。第二点は、欠席がちな学生への対応をどうするかという点である。コースの後半になると、グローバルハウスに滞在中の学生の中には体調を崩し休むものも多く、欠席した授業内容を個別指導だけでカバーすることが、時間的に無理であったため十分なサポートができなかった。そのため、欠席した後、学習意欲を失った学生への対応をさらに工夫する必要があると思われる。

プロジェクトでは、一つのテーマ「日本の古い建物」を設け、5週間にわたる研究課題とした。3週目には校外学習を、4週目には発表、5週目にはパネル作成を実施、すばらしい結果を得た。これらの活動を通して、学生たちが着実に実力をつけている様子がわかり、大変喜ばしいことであったと思われる。

コース全体の総括としては、学生にとっても教師にとっても、実りのある6週間であったといえる。残念な点は、単位や成績を必要としない学生の学習に対する取り組みの甘さが見られたことであった。スケジュール上、あらゆる点で時間的な余裕がなく、日々新しい文法導入に追われ、余裕のないコースであったと思われ、今後の課題として考えてゆきたいと思う。

C4		セクション AB	
I 担当講師名			
A: 濱家優子 (コースヘッド)・萩原章子		B: 永富あゆみ (コースヘッド)・山木戸浩子	
II 学生のうちわけ			
学生数	25名	男性	12名・女性 13名
国籍	アメリカ20名、台湾2名 シンガポール1名、日系アメリカ人2名 (アメリカ国籍)		
III 教材 (書名、扱った課の番号など)			
主教材	『日本語中級 J301』 スリーエーネットワーク (第1課、第3課～10課まで) 『ICU 中級コース 漢字1』		
副教材	読み物 『日本語中級 読解入門』 (アルク) 『中級からの日本語 読解中心』 (新典社) インターネット(goo) から「ファン・サブ」について (2グループで討論) この他、各自作成したもの (C4のファイル参照)		
視聴覚教材	リスニング 『毎日の聞きとり50日 (下)』 (使役、受身など復習項目) 『中級文化日本語 I』 DVD 『電車男』 東宝 CD 『大きな古時計』 ～平井堅～ 『スターゲイザー』 ～スピッツ～		
IV コースの目標			
(1) 教科書『日本語 J301』を通して、新しい文法、表現、言葉、漢字を勉強し、正確に聞いたり、話したり、読んだり、書いたりできるようになる。			
(2) プロジェクト「日本/日本人/日本文化についてインタビューしてしらべる」を完成させる。サマーカーコースで勉強した文法、表現、言葉、漢字を使いながら、説明、意見、感想などをまとめた内容でプレゼンテーションすることができ、正しい文体(スタイル)で、つながりのある文を作り、まとめる。			
(3) 日本人とのコミュニケーション、または、メディアを通して、日本事情/日本文化について学ぶ。			

V 評価の基準	
①クラス・アクティビティ (5 points: Listening Exercise; conversation /visitor session; class discussion etc.)	10%
②宿題 (10 points: Including writing exercises in each lesson + lecture reports)	15%
③クイズ (単語・漢字)	10%
④作文 (4回)	10%
⑤スピーチ (2~3回)	5%
⑥レクシントテスト (3回) (リスニング2回、オーラル2回、作文3回を含む)	20%
⑦プロジェクト (プレゼンテーション+原稿)	15%
⑧期末試験 (Final Exam)	15%
VI 授業の構成 (『日本語 J301』を中心とした1課のうちわけ)	
<p>① (予習として): その課の漢字ワークシート・文法ワークシートを宿題として出す。</p> <p>②その課の漢字・単語クイズを行う。</p> <p>③その課で扱う文法事項の確認、練習を行う。(聞いたり、話したり、書いたりする活動+練習問題)</p> <p>④その課の本文を読む。(読む前の予習も場合によってはあった。)</p> <p>⑤教科書の文章の型、Q&Aを確認する。</p> <p>⑥教科書の言葉のネットワーク・話してみようの部分を確認、練習する。(これに関連したテーマでディスカッション、書かせる問題なども行った。)</p> <p>①~⑥の基本的な流れの中にリスニング練習、ビデオ、ビクターセッション、スピーチ、漢字練習、読解などの活動を入れて行った。70分全部が文法の授業というのは、大変なので、クラスの前半は、漢字練習で、後半は、文法などのように、授業時間を半分に分けて組み合わせて行った。</p>	
VII 授業の内容 (『中級日本語 J301』を中心に)	
①聞く	主教材に『聞く』練習がなかったため、一週間に3回ぐらい違う教材を使用して、リスニングの練習を行った。その他は、独立した練習はなく、クラスでのディスカッションで聞いたり、話したり、発表を聞いて、質問をしたりした。
②話す	クラスでのディスカッション (教科書のテーマより) や、トピック別の会話の練習やスピーチ (3回)、それから大きな口頭発表をした。
③読む	基本的には、教科書の課にある読み物を読んだ。その他は、読解として、違う本から1編もしくは、2編選んで読んだ。
④書く	インタビュープロジェクトのレポートを書かすための練習として作文を4回書いた。その他、教科書の3課のみ作文練習を行った。最後の発表では、全員がパワーポイントを作成した。
VIII 校外学習	
日時	7月27日 (木)
行き先 活動内容	北とぴあ (王子) AAS Japan おえかきクラブ主催 日本文化体験という目的から、AASJapan おえかきクラブが行っている体験教室に参加し、先生の指導のもと絵手紙を書いた。また、扇子にも絵を描き、持ち帰った。絵をはがきに描くだけでなく、漢字を使って、短いメッセージも添えた。
IX 総括 (良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等)	
セクション A: 全体的に明るく素直な学生が集まっていたように思う。クラスメートともうまくやっていたようで、授業中もお互い協力して課題を行っていた。ただ、リーダー的な学生がいなかったせいか、最後まで、アジア系の学生とアメリカ系の学生があまり交わらないという感じは受けた。授業に関しては、出席率もよく、宿題も提出日に出せていたと思う。コース中、寮で風邪がはやっていたようで、それで体	

調を崩して、休んだ学生が後半は、多かった。比較的、読んだり、書いたりする活動より話したりする活動のほうが積極的に参加していた。ビジターセッションで、日本人のボランティアの方々と話している時は、とても生き生きとし、楽しんでいた。教科書の本文読解では、学生の興味を引き付けるためにさまざまな努力をしなければならず、大変であった。日本人を対象に行ったインタビュープロジェクトは、それぞれ個性的なテーマについて調査し、発表できた。最後に行ったパワーポイントを使った発表は、よくできていたと思う。人前で話すのが苦手な学生もそれを克服し、素晴らしいものであったと思う。改善すべき点として、午後の個人セッションの時間に各自の文法の弱い所などを重点的に指導すればよかったと思う。それから、どのセクションにも言えることだが、学生同士で英語の使用が目立ったことも残念であった。また、クラス内でサマーコースのような集中型のコースで勉強するということをあまり理解できていず、勉強にむらがあった学生もいたので、このような学生の対処をどのようにするかということは今後の課題となるであろう。他の学生にも知らず知らずのうちに影響していたかもしれない。そのため、セクションAは、安定してできている学生とできていない学生との差が大きかったように思われる。以上のような課題もあるが、全体的にはコースを終えて上達が見られる学生が多かったように思われる。(濱家)

セクションB: 基本的に、セクションAと同じ内容でコースを進めた。プレースメントテストの結果では、C3あるいはC5とのボーダーラインの学生も何名かいたが、進んで協力し合い、日本語能力の差による顕著な問題もなく、まとまりのあるセクションであったと思う。出席率、課題提出ともにほぼ完璧であった。与えられた課題の中で、話すのが得意な学生はディスカッション、余り発言しないが書く力のある学生は作文で個性を発揮していた。最後のプロジェクト発表は、そのようにお互いを尊重し切磋琢磨する、というクラス全体の長所の集大成とも言えるとも言えるべき素晴らしいものであった。ただ、各課題(教科書の文法事項、作文、ビジターセッションでのインタビュー、短いスピーチ等)が最後のプロジェクト発表につながるという流れがつかめず、プロジェクトのテーマの軌道修正を余儀なくされた学生も出た。コース初期にフローチャートで流れと各課題の位置づけを明確に指示、課題ごとに再確認させながら進めていくことが必要であったと反省している。個人セッションでは、最初に個々のサマーコースで達成したい目標を聞き、それぞれ敬語、自動詞他動詞、使役受身などを復習し、また、後半はプロジェクト発表についての相談をした。次のセッションで復習、積み上げができるよう、両講師がセッションの内容のメモを残すようにした。毎週月曜日にサインアップさせていたが次のセッションまでの期間にばらつきが出る結果になったので、同じ曜日にセッションを受けられるよう配慮すべきであった。授業の枠を超え、積極的に日本語、日本文化を学ぼうとする姿勢が見られた一方で、休み時間は英語が飛び交うことも多く、授業中もふとしたはずみに英語が出てしまうのは残念であった。ペアワーク、ディスカッションの準備中も日本語使用を徹底させた方がよかったのではないかと思う。また、自律学習のできる学生がそろっていたので、副教材の難易度を上げてよかったかもしれない。(永富)

C5		セクションAB	
I 担当講師名			
A:松本ゆみ(コースヘッド)・須田敦子		B: 中川路子(コースヘッド)・高宮優実	
II 学生のうちわけ			
学生数	19名	男性 8名	女性 11名
国籍	アメリカ14名、オーストリア1名 香港1名 台湾1名 カナダ1名 日本1名		
III 教材(書名、扱った課の番号など)			
主教材	『文化中級日本語II』 「我が社の小さな製品(ウォークマン)」(抜粋) 『日本語中級J501』 スリーエーネットワーク 『ICU中級コース2漢字』 ICU(1課~6課)		
副教材	『会話に挑戦中級前期からの日本語ロールプレイ』スリーエーネットワーク 『中上級者のための速読の日本語』 The Japan Times		

	『新日本語の中級 会話場面・語彙イラストシート』スリーエーネットワーク	
視聴覚教材	『毎日の聞き取り50日(下)』 凡人社 テレビ番組(バラエティ、情報番組)	
IV コースの目標		
<p>中級中盤のレベルで四技能が総合的に使えるようになることを目標とした。具体的な目標は以下のようである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 場面や相手によってスピーチの種類(フォーマルかインフォーマルか)を適切に選び運用することができる。 ・ フォーマルスピーチを使って上手に意見交換をすることができる。 ・ 話し言葉と書き言葉の区別ができ、適切なスタイルで意見文やレポート、エッセイが書ける。 ・ 要約・叙述・描写・説明・報告ができる。 ・ 自然な速さの日本語を聞いて、必要な情報、または大意がとれる。 		
V 評価の基準		
クラス参加(出席、宿題)		10%
作文4回(書き残したものは宿題) / 期末作文テスト		10%
聞き方(ビデオ/テープ教材のワークシート/中間・期末テスト)		10%
話し方(スピーチ2回/ミニレクチャー1回)		10%
クイズ(漢字/言葉/文型クイズ)		10%
中間テスト(漢字/言葉/文型/読解/口頭テスト)		筆記、口頭10%ずつ
期末テスト(漢字/言葉/文型/読解/口頭/作文テスト)		筆記、口頭10%ずつ
インタビューリサーチプロジェクト(発表/レポート)		10%
VI 授業の構成(1週間/1課のうちわけ)		
<p>課によって異なるが、1課の平均的な配分は以下の通りである。学生には、原則として、漢字、言葉、読み物、文法は復習シート、言葉は予習シートを宿題となるように渡した。</p> <p>漢字、文法+練習A、作文、言葉のネットワーク 読み物+話す、言葉+話す 話し方(ロールプレイ) スピーチ/ミニレクチャー リスニング(ビデオかテープ) 日本人ゲストとの会話練習 速読、プロジェクト</p>		<p>それぞれ1コマ それぞれ1コマ 1課に3~4コマ</p>
VII 授業の内容		
①聞く	テープ教材とビデオ(ドキュメンタリー、バラエティ)を使用し、大意取りディクテーションをさせ内容把握をさせた。また、ビデオを通して日本文化の紹介に努めた。	
②話す	日常生活で学生が直面することが多いであろう場面を想定しロールプレイをさせ、数日後に指名しておいたペア数組に短いスキットを発表させた。	
③読む	主教材の読み物を使用して精読をし、要点や全体の構成、筆者の主張を把握し、要約の練習をした。また、自分の意見を述べたり、文章にまとめたりした。練習Bは適宜利用した。	
④書く	作文は各回テーマを決め、表現や書き方等を導入後、残りの時間を使ってクラス内で書かせ、書き残した分を宿題とした。原稿用紙の使い方も指導し4回のうち3回は手書きの縦書きとし、1回をワープロ打ちとした。	
VIII 校外学習		
日	時	7月28日(金)

行き先	江戸東京たてもの園
活動内容	現地集合とし行き方を説明した紙を渡しておいたが、それでも迷って遅れてきた学生が三人いた。バスで来るべきところを徒歩で来たために予想以上の時間が掛かり遅刻してしまった学生もいたので、今後は、武蔵小金井駅から徒歩で来た場合どのぐらい時間が掛かるかを記しておいた方がよいだろう。園内は各自自由に回らせた。多種多様な建物の中でも特に「千と千尋の神隠し」のお風呂屋のモデルになった銭湯に興味を示す学生が多かった。宿題として感想文を書かせたのだが、其々興味をもった建物があったらしく、各々楽しい時間を過ごせたようであった。

IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）

セクション A: 学生のレベルは全体的にバランスが取れており、また素直で明るい学生ばかりで教えやすいクラスであった。新しい言葉や文法を積極的に使おうとする学生が多く、たとえそれが間違っていたとしても彼らの姿勢や進歩を日々感じる事が出来た。和気藹々とした雰囲気だったので、学生も間違えることを怖がることなくクラスに参加していたようだ。6週間の間で、やはり疲れからか中だるみで集中力に欠ける時期もあったが、最後のプロジェクトには皆熱心に取り組み、充実した発表をすることが出来た。反省点や今後の課題については、授業のカリキュラムで、スピーチやミニレクチャーを比較的早い時期に組んだが、もう少し後に回した方がよかったということ、プロジェクトについての目的や方法の説明を早めにした方がよかったということなどがある。各々の学習項目に十分な時間がかけられず、駆け足での指導になってしまったため、どれだけ彼らの期待に応えることが出来たか不安ではあるが、それぞれ活躍の場は異なるが、今後の彼らの一層の飛躍に期待したい。

セクション B: 他のクラス同様各学生の能力の個人差は見られたものの、教師の側は其々の学生のよさを引き出すよう心掛け、学生の側は互いの弱い部分を補い合うような形で臨み、全体的により雰囲気の中で学習をすることが出来たと思う。特に、話す能力が他の学生に比べて秀でている一方で読み書きの能力が劣っている二名の継承学習者と残りのクラスとのバランスを上手に取りながらクラス活動を進めていくことに気を付けた。結果的にその二者間の能力の差がマイナスになることはなく、むしろ互いの弱いところを補い合い、一方強い部分で刺激し合い、より活気のあるクラス作りに役立ったのではないと思う。

基本四技能をバランスよく伸ばすと同時に、各自弱い部分を当初から意識させ集中的に訓練するようにも心掛けた。例えば、日本に三年住んでいるため会話力や語彙力は高いが文法の正確さに欠ける学生は、特にその正確度を上げることを意識し、結果的にその部分でかなりの上達が見られた。継承学習者においては、漢字の読み書き、読解、作文など弱い部分を訓練し、特に作文能力は課題の回数を重ねる毎、明らかかな上達が見られ、上級に繋げていけるに十分な力を身に付けさせることができたと思う。普段の会話で敬語が正しく使えない、くだけた形で話してしまうなどの問題もかなり改善された。逆に、読み書きの能力は安定して高いが話す力が弱い学生達は、スピーチ、ロールプレイ、「ミニレクチャー」などの活動を通して、積極的且つ正確に話す力を伸ばすことに力を入れた。只、個人指導の時間をもう少し有効に活用して、イントネーション、アクセント、自然な文末表現の使い方などをより丁寧に指導できたら尚よかったと思う。個人指導の時間を弱点克服のために積極的に利用する学生が特定の学生に限られてしまったのも残念であった。

今回のコースで一番気になったことは、中だるみや疲れによるやる気の消沈(特に後半にかけて)が、昨年の担当したコースより目立ったことだ。課題の量に圧倒され時間を上手に使えず疲れ果ててしまったり、特にホームステイや学外の活動(テニスサークルなど)に参加していたりする学生はサマーコース外での留学生活に充てられる時間が十分に持てないと不満をもらしていた。どの程度時間を上手に使っていたか本当のところは分からないが、今後課題の量の調整、またはスケジュールの組み方を検討してみる価値はあると思う。

C6		セクション
I 担当講師名		
黒川直子 (コースヘッド)		小野純
II 学生のうちわけ		
学生数	14名	男性 6名 ・ 女性 8名
国籍	アメリカ 10名 香港 2名 台湾 1名 韓国 1名	
III 教材 (書名、扱った課の番号など)		
主教材	『日本語中級 J5 0 1』 第7課～第10課 『日本語中級 J5 0 1』 に付随する漢字テキスト (ICU 作成)	
副教材	『中・上級日本語教科書 日本への招待』 (抜粋) 『日本社会探検』『生きた素材で学ぶ中級から上級への日本語』 (抜粋) 『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』 (抜粋) 『やがて哀しき外国語』 (村上春樹) 『蜘蛛の糸』 (芥川龍之介) 『ブランコのむこうで』 (星新一) 他 漫画・新聞記事などの生教材	
視聴覚教材	ビデオ (テレビ対談番組、クイズ番組、ドキュメンタリーなど) 映画 『学校 IV 十五才』 NHK ビデオ『プロジェクト X』	
IV コースの目標		
四技能を伸ばしながら日本への理解を深め、上級レベルにスムーズに移行できる実力を身につけることを最終目標とした。具体的には下記の通りである。		
(1) 漢字や単語の知識を拡充し、正しく使えるようになる。 (2) 既習の文法や表現を整理し、新たな表現を学ぶ。 (3) 状況や相手に応じて、適当なスタイルの自然な言語が使える。 (4) 話し言葉と書き言葉の使い分けができる。 (5) 様々な接続詞を使って、段落レベルで話ができる。 (6) 自分の意見や考えなどが分かりやすく相手に伝えられる。 (7) 自然な早さの生の日本語を聞き取る力をつける。 (8) 新聞記事や小説などの読み物の内容を推測しながら読める。 (9) 分かりやすく構成のしっかりした論文が適切な文体で書ける。		
V 評価の基準		
出席・授業参加		15%
作文・宿題		15%
漢字・単語小テスト		10%
口頭発表 (5回)		10%
レッスンテスト (4回)		20%
期末試験		20%
研究プロジェクト (論文・発表)		10%
VI 授業の構成 (1週間/1課のうちわけ)		
主に教科書のトピックに沿って週ごとにテーマを設定し、テーマに関連するビデオや読解教材と合わせて1週間で1課のペースで進めた。毎日の漢字・単語の小テストに加え週に一度レッスンテストと口頭発表を行い、学習内容の定着を図った。スケジュールは週によって異なるが、およそ以下の内訳で行った。		
教科書	本文読解	2コマ
	文法	1～2コマ

	速読 (練習 B)	1 コマ
	語彙 (ことばのネットワーク)	1 コマ
	ディスカッション (書いてみよう)	1 コマ
	口頭発表	2 コマ
その他	読解 (生教材など)	2 コマ
	ビデオ	1～2 コマ
	会話 (タスク先行型ロールプレイ等)	1 コマ
	速読	1 コマ
	既習文法・表現の復習等	1 コマ

VII 授業の内容

①聞く	ドキュメンタリー番組や映画などのビデオ教材を内容の理解とともに意見交換を行うことを目的に使用。その他教師の説明やクラスメートの発表、ビジターとのディスカッション、校外学習活動でのガイドの案内の理解等。
②話す	毎日の授業でのディスカッションに加え、ビジターと討論を行ったり、待遇表現の復習やストーリーの説明の練習等ロールプレイ形式で行ったりした。さらに自分の興味のあるテーマについてのスピーチ (各自 2 回ずつ)、テーマに関する口頭発表 (5 回)、研究プロジェクトの発表などの機会を設けた。
③読む	教科書の本文に加え、新聞記事や小説、漫画、エッセイ等の読解教材を扱った。事前に内容質問などの課題を行って授業に臨む精読と、その場で大意をつかむ速読と合わせて行った。読解授業の予習、ビデオ視聴後の復習、週ごとのテーマ作文など、毎日書く課題を与えた。
④書く	また、コースのプロジェクトとして自ら選んだテーマについて 5～6 枚程度の研究レポートを書かせた。

VIII 校外学習

日 時	8月4日 (金)
行 き 先	江戸東京博物館
活 動 内 容	二つのグループに分かれ、博物館のボランティアガイドの説明を聞きながら江戸ゾーンを中心に見学した。事前にワークシートを配布して情報を記入する課題を与えておいたため、皆熱心に説明に耳を傾け、また活発に質問をして有意義な時間を過ごしたようである。さらに展示物の中で興味を持ったものについて調査し、発表するという課題を与えた。翌週の授業では土農工商から花魁まで様々なテーマでの発表や話し合いが行われ、江戸時代の暮らしや制度についての理解を深めることが出来た。

IX 総括 (良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等)

四技能を総合的に組み合わせることと同時に、内容にもある程度重点を置いてコースデザインをしたことが今年度の特色である。週ごとにテーマを設け、読解教材・ビデオや授業での話し合い、ビジターセッションでの意見交換などを通じ、テーマに関する知識や思考が積み重なることを目指した。テーマ以外にもコマースを使った活動や俳句・川柳を使った授業などを取り入れて、メリハリをつけるよう心掛けた。

テーマごとの口頭発表や毎日 1～2 人ずつ行ったスピーチ等、口頭発表の機会を多く設けたが、これによって学生主導の活発な話し合いが行われた。特にスピーチは学生自身の関心事をクラスメートと共有する場となり、コミュニティ形成にも役立ったと思われる。書く課題については、作文・研究レポート共に書き直しの作業を徹底させ、技能の向上を図った。このコースの集大成である研究レポート及び口頭発表は各自の努力の成果が表れるものとなったと思う。

コースの反省点としては、レベルの差異のある学生への対応が必ずしも十分ではなかったことである。特に文法が弱い学生には、もう少し復習の機会を与えるべきであったと思う。また 14 人と人数が多かつ

たため、積極的に手を挙げる学生に比べ受け身である学生の発言の機会が少なくなりました。上級の前段階というレベルを考慮して、クラスの人数をある程度調整することも必要だったのではないかとと思われる。

最後にプレースメントに関して気になった点を記しておきたい。単位取得のため C7 を強く希望したものの力が足りず C6 に入った学生がいたが、単位をあきらめたため取り組みが甘く、結果として授業についていくことが難しくなりました。所属の大学のプログラムが SCJ のコースのレベルをどのように認識しているのか疑問が残ったが、いずれにしてもこのように自己判定を前提にコースに参加するのは問題と思われる。また C5 から上がってきた学生で、後になって話す技能に比べて文法が極端に弱いことが判明し苦労したケースがあった。本人が前向きに取り組んだことが救いだが、限られた時間内でのレベル判定の難しさを実感させられた。

一般的には真面目で学習意欲の高い学生に恵まれ、実りの多い6週間になったと言える。殆どの学生がコースを通じて無遅刻・無欠席と出席率も非常に高く、どのような課題にも手を抜かずこちらの期待以上にしっかりと取り組んだ。学生達には今後とも頑張って学習を続け、更に日本語に磨きをかけてもらいたい。

C7		セクション	
I 担当講師名			
川上麻理 (コースヘッド)		鈴木貴美子	
II 学生のうちわけ			
学生数	4 名	男性	0 名 ・ 女性 4 名
国籍	アメリカ 3 名 (含む 台湾系 1 韓国系 1)、台湾 1 名		
III 教材 (書名、扱った課の番号など)			
主教材	新聞記事：朝日、毎日 フリーペーパー：『自己ゴミ化計画』藤原新也 教科書：『国境を越えて』より「日本人の飽食を支える開発輸入」(新曜社) 一般書籍： 『映し世のうしろ姿』より「困った謝罪癖」藤原新也 『プロ論』より「働くことがイヤになったとき」養老孟司 『世界を見る目が変わる 50 の事実』より「ロンドンの住民は監視カメラで一日 300 回撮影される」ジェシカ・ウィリアムズ 『日本人の価値観・世界ランキング』より「日本人の『グローバリゼーション』のイメージは不安先行」高橋徹 『坊ちゃん』夏目漱石 『蜘蛛の糸』芥川龍之介 『こぼしい日々』より「綿菓子」江國香織 『アナタとわたしは違う人』より「『お母さん』と言う女 VS 『ママ』と言う女」酒井順子 『納屋を焼く』村上春樹		
副教材	『どんな時どう使う日本語表現文型 500』アルク 1 課～18 課		
視聴覚教材	民放「世にも奇妙な物語－レンタルラブ」 NHK「プロフェッショナル 仕事の流儀－昆虫カードゲームの開発部長」 NHK「絵文字の謎」 NHK「トップランナー 現代美術作家・東芋」 NHK「難問解決 ご近所の底力－お隣に外国人」 民放ニュース「今日の出来事」		

IV コースの目標	
このコースは日本語上級コースであり、「話す」「聞く」「読む」「書く」の4技能について、これまでに学習した中級レベルまでの日本語力にさらの磨きをかけ、より母語話者の日本語に近いレベルまで到達することを目的とする。	
V 評価の基準	
中間試験（漢字、文法、読解、インタビュー）	10%
期末試験（漢字、文法、読解、インタビュー）	10%
論文プロジェクト（論文、口頭発表）	30%
文化プログラム講義レポート	5%
小テスト（漢字、文型）	15%
宿題提出（読解予習シート、ビデオワークシート等）	20%
スピーチ、討論	10%
授業の構成（1週間／1課のうちわけ）	
読解	4～6コマ
表現文型	2コマ
論文	2コマ
口頭発表	2コマ
討論	1コマ（ビクターセッション）
ビデオ視聴	1～2コマ
各技能は互いに結びつくように配慮したので、上記の分類は形式的なものである。他に、使役、敬語などの復習の時間も設けた。	
VII 授業の内容	
①聞く	ドキュメンタリー、ドラマ、ニュース番組などのビデオを見て、言葉、表現、内容を正確に把握すると共に、内容について意見交換を行った。
②話す	ビクターの方々にも入っていただき、ニュースや論文のテーマ等についてスピーチを行い、その内容について意見交換をした。最後に行った論文の口頭発表が「話す」の活動の集大成となった。
③読む	新聞記事、評論、文学作品、エッセイなどを読むことによって、様々な文章のスタイルに慣れ、語彙を増やした。また、読み取った文章について、適切な日本語で要約したり、自分の批評や意見を加えたりした。
④書く	論文を書くための基本を学び、自分の選んだテーマに沿ってインタビューやアンケート調査を行った結果について分析、考察したものを論文にまとめた。他に、文化プログラムの講義内容をレポートにまとめた。
⑤文型	毎回、文型の短文作りを予習として課し、クラスではそれを使いこなせるように練習をし、小テストを行った。
⑥漢字	読み物に出てくる漢字の“読み”について小テストを行った。
VIII 校外学習	
日 時	8月4日（金）
行 き 先	江戸東京博物館
活動内容	C6と合同で行った。江戸ゾーンを中心に、実物資料や模型を見ながら大名と庶民の暮らしについて学んだ。体験コーナーでは、積極的に体験を楽しんだり質問をしたりする様子が見られた。また、ボランティアガイドの方の説明が非常にわかりやすく、後日学生の書いたレポートにも「大変有意義であった」という感想が多く見られ、中には、後日再度訪れた学生もいた。

IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）

このコースでは、週に5コマ程度の読解の授業を中心としてカリキュラムを組んだ。読解教材は、討論に結び付けやすくなおかつ様々なジャンルから選ぶことを念頭に置いた。少人数のクラスながら、自分の意見をしっかり持ち、多方面に関心を持つ学生がほとんどであったことから、読解の授業に限らずビデオ視聴やスピーチの後の討論においても、非常に活発な意見交換ができたと思う。しかし、フォーマルな発表形式となると、緊張して力を十分に発揮できない様子が見られたため、コースの後半では、会話ボランティアの方々にご協力いただいた。毎回、スピーチに対するフィードバックを行った結果、授業最終日に行った論文の口頭発表では、パフォーマンスの面で特に大きな成果が見られたと思う。

論文プロジェクトでは、各自難しいテーマを選び、インタビューやアンケート調査を積極的に行った結果、内容も深く掘り下げなおかつ高度な表現を用いたものを、論文の書き方の基本に従って書き上げた。一方、文化プログラムの講義レポートについては、きちんとフィードバックを行う日程的な余裕があればなお良かったと思う。

コース全体として、学生にとっても教師にとっても充実した6週間であったと言える。残念だったのは、出席日数が足りずコースを途中で諦めてしまった学生がいたことと、プライベートとの両立がうまくいかず、後半やや取り組みが甘くなった学生がいたことである。これは、学生個人個人がサマーコースの目標をどこに置いたかによって結果が分かれたと言える。だが、決して楽ではないこの上級コースをやり終えたことを自信として、それぞれが次の目標に向かって進んでいってほしい。